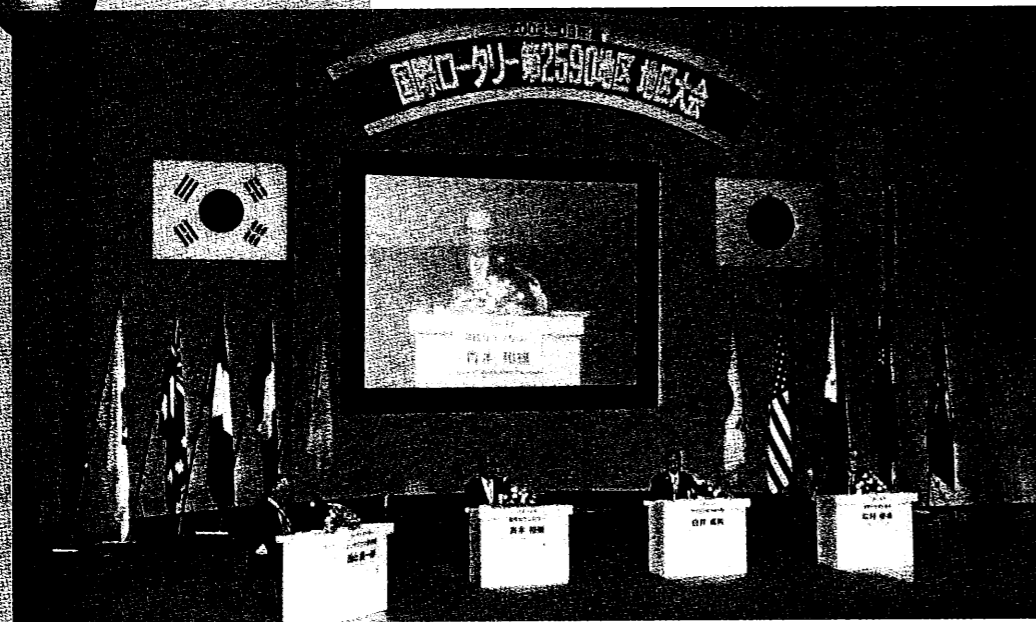


青少年問題について



● 失敗を成熟の糧と捉えること

西山 青少年問題について、これからパネルディスカッションを行いたいと思います。それでは、早速青木先生のお話をお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

青木 日ごろ子供と向き合ってカウンセリングをしていますと、子供たちの心の声が聞こえてきます。言葉にならない悲しみやつらさが子供の心からあふれ出てくるような気がします。子供たちの問題、例えばいじめとか、不登校とか、非行とか、それから依存症など、青少年の問題とされることが、カウンセリングの過程で子供の問題ではなくて大人側の問題であることに気づかされるのが少なくありません。そうした事柄について、具体的な事例等を通してお話をさせていただきたいと思います。

先生方にカウンセリングの仕方を教えてほしいということで、学校にお伺いすることがあります。そ

■コーディネーター

地区大会シンポジウム委員長
西山 藤一郎 (横浜保土ヶ谷R.C)

■パネリスト

教育カウンセラー
青木 和雄
地区社会奉仕委員長
白井 成男 (横浜南R.C)
地区社会奉仕委員
松村 俊幸 (横浜本牧R.C)

(順不同・敬称略)

のときに、ロールプレイという役割演技を先生方にさせていただくことがあるんです。例えば、いじめた子供の役、担任の先生の役、それを両方とも先生にやっていただくんです。そうすると、先生方の発言として、共通することが幾つかあることに気づいたのです。どんなことかといいますと、先生方はいじめをした子供に対してまずこう言います、「先生はおまえたちに、いじめはいけないということをいつも教室で言っているよな」。まず先生は正論を盾にして、自分は正しいことをおまえたちに教えているなどということを結構言います。その次に、「それにもかかわらず、おまえはなぜいじめたんだ。どうしていじめたんだ。わけを言ってみろ。黙っていないで答えてごらん」という形で矢継ぎ早に先生方が責め立てていく。そうすると、いじめた子供の役割をやっている先生は、正論の前にまさに防衛せざるを得なくなって、机をバタバタたたきながらキレる直前までいってしまう。そして何と言うかという、「だって、おれだけがいじめたんじゃないよ。あいつだっていじめているのに、何でおれだけを先生は責め立てるんだよ」ということで責任転嫁を図っていくという、まさに話し合いのかみ合わせがなされていないということを感じます。そうやって先生方は一方的にまくし立てていくといった実態を幾つもの学校で私は体験しています。

これは先生方ばかりではなくて、親と子が相談に訪れるときにもあります。あるとき母親と中学生の女の子が来ました。母親は、一方的に問題行動を起こした女の子を責め立てました。お母さんは、「私は小さいときからあなたを一生懸命育ててきた。あなたのためになるということは何でもやってきた。私は一生懸命育ててきたのに、何であなたは今このようなことをやっているんだ」ということをずっと言い続けていました。子供は20分ほど聞いたままでいたんですけども、やおらすと立ち上がって言いました。「あんたが変わらなかつたら、私、変わらないよ」。お母さんに向かって子供はそう叫びました。「私はあんたとは別な人間なんだ。今までじっと我慢してきたけれども、私は私でありたいんだ。お母

さんに操られるマリオネットの存在というのが私は嫌なんだ」。これはまさに子供の叫びとして、そうだろうと思うようなことでした。

別の母親は相談のときに小さな女の子を連れてきたのですけれども、「この子は私の思うように育っていないんです」と並べ立てて最後にお母さんは、「あんたなんか産まなければよかった」という言葉を吐きました。そう言われた女の子は悲しそうに、今までもずっと続けていたであろう自傷行為をその場でも続けていました。

また、中学校3年の男の子が泣きながら私のところへ来ました。その子は「おまえが学校に来ると学校が荒れてしょうがない。おまえが学校に来ないと学校は平和なんだ。だから、おまえはこの学校にいないほうがいいんだ」と先生に言われたというんです。私がずっと話を聞いているうちに、泣きながら彼は言っていました。「おれの話をごんなに一生懸命マジに聞いてくれた大人は先生が初めてだよ」。そして、その子は「おれ、将来学校の先生になりたい」と言ったんです。「なぜ」と聞いたら、「おれ、子供の気持ちがわかる先生になりたいんだよ」と泣きながら彼は言っていました。

どんな子供も、「産まなければよかった」と言われる子供も、「いなくてもいい」と言われる生徒も、いていいはずはありません。そうした精神的な虐待、別な言葉で言えば、存在を否定されること、存在を無視されるということが、子供にとってみたらどんなにつらいことかということ、私はさまざまに子供たちとかかわって、本当に嫌というほどわかっています。大人たちというのは割合一方的に子供に押しつけていくということが結構あるように思うんです。一方的に押しつけるよりも、子供の気持ちをわかろうというスタンスが今大事なことを私は強く感じています。これは大人も同じで、コミュニケーションの場というのは相手の気持ちをわかろうとすることがベースにあると思います。

子供の話を肯定的、共感的に聞いていますと、子供は絶対情緒が安定してくる。「ああ、この大人は私の気持ちをわかろうと努めてくれている」。そのときに私たちは子供に言えばいいと思うんで



西山藤一郎シンポジウム委員長



パネリスト
社会奉仕委員長

白井成男社会奉仕委員長



パネリスト
社会奉仕委員
俊幸

松村俊幸社会奉仕委員

す。自分たちの言葉で、大人の言葉で、生き方について、自分が生きてきたことについて、君たちはどう生きるべきかという、自分の哲学を子供に語るべきじゃないかなということを強く感じます。子供は未熟です。未熟だから子供だと僕は思うんです。考え方も感情も未熟です。失敗も多くすると思うんです。でも、そうした未熟な子供を成熟した大人に育てるのが私たちの役割かなと強く思います。失敗をマイナスと捉えないで、その失敗を成熟した大人にするための糧として、私たちは見守っていかなければいけないんじゃないかなという気がします。

西山 ありがとうございます。それでは、白井さん、お願いいたします。

●地域社会と一緒にやっっていく学校

白井 まずちょっとロータリーの教育とのかかわりということで説明したいと思うんですが、「川崎、横浜の学校へ講師派遣、職業体験を提供、ロータリーものしり博士、みんなの応援隊」ということで始まり、横浜の500校近い小中学校と、川崎地区の170校にこの本をお渡ししてきました。感謝申し上げますのは、70人近い方が、とりあえず今年の「慈愛の種を播こう」という形で、この教育の分野に外野席から内野席におりて、まず学校を知ろうということでスタートしました。学校というのは学校長だけで運営していくというのが従前の形だったようです。それが、地域社会の方たちと一緒にやっっていくという流れができ、ぜひ12万人の日本のロータリーの見識を学校運営の中に注入していきたいということです。手段として、実は70人の方たちにまず

学校を知っていただく、そして評議員の要請があったら快く受けていただくということで、横浜の評議員の仕組みとか、具体的には評議員という名前は出てきませんが、そういう中でぜひ日本の教育問題にロータリーがかかわっていききたいというきっかけをご理解いただきたいということでございます。

西山 ありがとうございます。現在PTAのほうにかかわっていらっしゃる松村さんのご意見をいただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

松村 私は今、下の子供で小学校のPTA会長をやっておりますが、5年やっておりますので、今の横浜の公立小中学校の流れは大体わかるような感じがしておりますので、その話をさせていただければと思っております。

先ほど白井さんのほうから評議員制のお話が出ましたが、横浜市内に限って申し上げますと、小中学校合わせて約500校ありますけれども、その中で「まちとともに歩む学校づくり懇話会」という名称でスタートしております。私どもの小学校では3月に第1回目の会合を持ちましたが、その中で選ばれるメンバーは大体6名から8名ということで、お伺いしております。去年いろいろな区で評議員の問題について20~30名の地域の方々を集めて実験的にスタートしたそうですが、20~30人で議論するとなかなかまとまらないということがございまして、大体6名から8名という人員で今年スタートしております。

要は、学校というのは、今まではどちらかという閉鎖的な部分が非常に強いと言われておりますが、公立の場合の学区制も選べるような時代になっ

てきました。横浜では「まちとともに歩む学校づくり懇話会」ですけれども、今年度中にスタートしております。

ロータリー人は、年齢的にどちらかというとお孫さんの世代の人たちが多いような感じがします。学校の現状はわかりづらいという部分がございます。先ほど西山先生がお話しされましたが、いきなりロータリーの人が直接学校に行って「評議員みたいな形でやらせてください」と言っても、学校のこともわからないと受け入れてもらえないという事情もございますが、先ほど白井委員長がお話しされておりました「ロータリーものしり博士」ということで、少しでも学校にかかわっていくことができれば、このような評議員にどんどんロータリーの人が入っていけるんじゃないかなと思っています。

●物づくりを忘れた教育

西山 ありがとうございます。

実は、教育に3本の柱とっております。オギャーと生まれて家庭教育、それから学齢に達して学校教育、その2本の柱にあわせて社会教育。多分社会教育については皆さんはなじみがないと思いますが、これからちょっと社会教育に触れます。この3本の柱が五徳のように支えて人間を育てると、教職に携わっております私たちは理解しておりました。もう皆さんおわかりのように、家庭教育が崩壊しているから学校教育が崩壊しているんだという面があるわけです。

4月になって小学校1年の担任に先生たちがなりたくないと言います。学級運営がうまくいかないんです。そうしたらある学者が、自由保育をやっている幼稚園から来た児童が非常に授業中にうろうろするというわけです。私も今は幼児教育に携わっているわけですが、これを聞いて、ちょっと意外だな、そうじゃないだろうと思うわけです。

今のように教育全体が荒れたのは、先生に問題があって、家庭に問題があって、それからもう一つは教育委員会とその裏で操っている文部科学省、それと社会がその機能を果たしていないというところに問題があるわけです。ですから、だれが悪いという



青木和雄氏プロフィール
横浜市保土ヶ谷区在住。
早稲田大学第一文学部心理学科卒。
現在、教育カウンセラー、神奈川県子どもの人権専門委員長、法務省人権擁護委員、保護司、障害者地域作業所「ダンボ」運営委員、横浜教育フォーラム顧問等を務める。
著書、「ハートボイス」「ハッピーバースデー」「ハードル」「HELP!」「イッソップ」その他多数。

のではなくて、明治100年で一生懸命教育を築いてきたところが、終戦でぱったりと崩れてしまった。この辺に問題があるわけです。

私は初めて中学に奉職しまして、8年間数学を教えました。そのときに校長に何と言われたか。6か月たって、「いよいよおまえも試用期間が終わったな。本当の先生になったな」と。そんなのは忘れてしまっていたんです。今、採用されると大体3か月というんですけれども、3か月の間に辞めさせられる先生がいなかった。辞めさせることができなかった。だめな先生は首にしなければいけなかったんです。そういうところもお互いに責任があっただろう。

それから勤務評定というのがあります。普通、雇い主は必ず社員の評価をしますね。それが学校ではできないんです。先生に対しての指導監督ができませんでした。そういうところが問題だと思うんです。

それから、今、物づくりができないということで。私は主に工業高校で教鞭をとってきました。物をつくらうという、物をつくらせる、つくることの理論を学ぶ、技術的な仕組みを学ばせるというところがあったのですが、一時期、昭和40年代ですが、神奈川県教育委員会が非常に画期的なことをやりま

した。ドイツの学校をまねして、技術高校という学校をつくったんです。1週間に3日ほど学校へ来る、あとの3日は企業へ行って働くという大変いい仕組みの学校をつくったんです。そうしたら、それが12年つぶれてしまいました。つぶれた理由は、先生たちが、旋盤とか、工場で学んだことを先生以外の人がなぜ評価するのかということで、大変いい仕組みだった技術高校がだめになった。もう一つは、親たちが、工場で働くような学校へは子供を入れたくなくて、毎日学校で勉強してほしい。そういうところでうまくいかなかったんです。

ドイツなどは、ギムナステックといって、そういうところを出た人が大手を振って、やっぱり技術屋だということで社会でちゃんと評価されたんです。それが日本ではうまくいかなかった。高度成長時代であったことが災いしたのかもしれませんが。そういうことが重なって、技術高校は工業技術高校と名前を変え、また再編成で今までの工業高校に吸収されてしまいました。相模原技術、大船技術高校、川崎技術高校、平塚西工技などがあって、平塚西工技などは生徒に評判がよく、自動車科がありました。職業体験、それからインターンシップということで、学校の外へ出て工場を1日体験してくるのです。例えば私の幼稚園とか、養護老人ホームとか、そういうところに生徒が何日か行って勉強してくる。これは先ほど申し上げた社会教育の一環にもなるのかなと思っています。

また、ロータリアンにお願いしたいことは、社会教育をもっと盛り上げてみんなが手伝わなければだめだということです。社会教育についてもうちちょっと手伝ってほしいことは、少年野球、サッカークラブ、ボーイスカウト、ガールスカウトといったところにも目を届かせて、かかわってほしいし、金も出してほしい。そういうことを私は切にお願いしたいのです。それから、家庭教育も、家庭だから我々は手伝えないよじゃなくて、家庭教育の援助をしていきたい。母親学級を開くとかと言われても、一部のPTAの役員さんしかいないんです。ですから、ここで特に声を大にしてお願いしたいことは、ロータリアンすべて、学校教育も手伝う、家庭教育も手

伝う、社会教育にも協力する、こういうことを大いにしてほしいなと思います。それでなければ子供は育たないと言いたいです。

学校というのは非常に閉鎖的です。私は8年間中学にいて数学を教えていました。その後、工業高校に転勤しました。工業高校の先生たちからは、「中学に今までいたやつが工業高校に来て、できるのかよ」と言われました。それが非常に閉鎖的なところなんです。今度、学校を辞めて、家業である幼稚園を継ぎました。幼稚園の先生たちが、「口幅ったいことを言うけれど、幼児教育はまだ習ってないだろう」と。みんな閉鎖的なんです。一時期6年間、紅葉坂にある青少年センターの展示課長をしました。展示課ですから、博物館と連携があるわけです。博物館のそれを英語ではキュアレーターと言うんですけども、外国の博物館へ行って「おれ、キュアレーターのセクションの課長をやっているんだ」と言ったら、「どうぞごらんください」とただで見せてくれるぐらい、信用がある職業なんです。でも、そこへ行って、「こういう展示の方法をやったらどうだろう」と言うと、「課長、それは私たちが既に10年前にやったんですけれども、うまくいかなかったんです」。どこの社会も、後から来たやつは難しいですね。それから、私が教頭で赴任しましたら、定時制で、9月人事の最終で、9月15日に修学旅行だったんです。今までは教頭が大体の責任者だと言われたんです。それで行きました。そうしたら、先生たちは何と言いましたか。「教頭、定時制の経験はあるの」。その裏には「定時制のことも知らないで、おまえ、教頭になったのかよ」という批判がある。

このように、教育畑というのは本当に閉鎖的です。私がこの話をしたのは、評議員でお手伝いいただきたいのですが、「おれは評議員だ」と言っただけで、多分話にならないだろうとお考えいただいて、皆さん方で地域と学校と仲良くなってやっていただきたいなと要望したいと思います。

それでは次に、また青木先生に回します。

●自分の尺度でない想像力を

青木 学校の評議員制の問題が今それぞれの立場

で出ていますけれども、確かに学校というのは閉鎖的だなどということは、私も現場にいたことがありますので強く感じます。そこで、評議員の中にロータリーの方々がお入りいただくと、閉鎖的なところの壁が少し風通しがよくなるかなという思いがします。教育というのは数字であらわされるものでもないんです。だから、教育というのは言うまでもなく人間づくりなわけで、長期的なスパンといいますが、時間を必要とします。だから、企業の方々はずぐ数字という形が出てくるのかもしれませんが、人間というのはそうした数字だけで育つものではないということもちょっとご留意いただけたら大変ありがたいという気がすごくします。

体験した事柄でちょっとだけ申し上げたいことがありますので、お話しします。ある日のこと、相談室にお母さんと高校に入ったばかりの男の子が飛び込んできました。何だろうと思って聞きましたら、入学したばかりの子でしたが、「うちの子はきのう先生に殴られた」と言います。その子は、顔にあざをつくって相談室へ来ました。お話を伺ったら、こういうことでした。高校の入学式が終わって翌日のこと、体育館に新しい1年生が400人ほど集まっ

た。そこで、ステージの上から先生が、「これから高校生活3年間の生徒指導上の問題で大事な話をするから、おれの話をよく聞くんだ。全員こっちを見る」と叫んだ。新1年生が全員その先生のほうを見た。しかし、1人だけ横を向いた子がいた。すぐ目立った。そこで、その先生が「おれのほうを見て話をよく聞けと言ったのに、何でおまえは横を向いた。そう、おまえだ。出てこい」と言うのでその子はステージの上へのせられて、「何で横を向いた。わけがあるんだったら言ってみろ」と言って、彼が何も言わなかったらドンと殴った。「何とか言え」。しかし、彼は何も言わなかった。立て続けに2発、先生は殴った。その日彼は先生に何も言わずに、そして1日が終わって家へ帰った。青あざをつくった息子の顔を見てびっくりしたお母さんが「どうしたの」と聞いたら、今のような話をした。

私のところへ相談に来ましたから「先生が『おれのほうをよく見る、話をよく聞け』と言ったのに横を向いたというのは、何かわけがあったのかな」と聞いたら、お母さんが言っていました。「実は、うちの子は5歳ぐらいのときに、高層マンションに住んでいたんですけれども、2階の踊り場で友達とふ





熱心に耳を傾ける会員

ざけっこをしていて、階段を一步踏み外したらゴロゴロと2人とも階段を転げ落ちて、1階のコンクリートの上へドーンと落ちてしまった。そのときにうちの子は右の耳を強く打って鼓膜を破り、中耳も壊してしまいました。それ以降、右の耳が聞こえないんです。小さいときからうちの子は、人の話を聞こうとするときに、聞こえる左の耳で聞く習慣があった。きのうも、先生が『おれの話をよく聞け』と言った瞬間に、うちの子は反射的に聞こえる左の耳で聞こうと首を横に向けた。そのときに先生が『何で横を向いた。出てこい』というので殴られた」という。その話を聞いて私は、「だったら、そのことを先生に言ったらよかったのに」と思わず言いました。彼は一言、「僕、プライドがありますから」と言いました。そうだろうと思う。入学した新しい400人の友達の前で、「僕、右の耳が聞こえないというハンディキャップがあるんです」ということは言えなかったのだらうと思うし、さらに言うとするならば、やみくもにドンと殴った、そう、人間としてあるまじき行為を行った先生に対して言い訳なんか言えるか、彼のプライドがそれを言わせなかったのだらうと思います。

後日私はその先生に会いました。頑強な先生でした。両方の耳がきちんと聞こえる方でした。私たちというのは、自分が健常だと、物事の考え方や判断は自分が尺度になる。両方の耳が聞こえる人は、ほとんどの人たちが両方の耳が聞こえるだらうと思います。速く歩ける人はバリアフリーなんか必要ない

でしょう。しかし、足が不自由で階段をのぼれない人もいるわけです。みんな両方の耳が聞こえるとは限らないんです。私たちは、自分の健常さを尺度にしてすべての人を見るのではなくて、つらい思いをしている、苦しい思いをしている、悲しい生育歴を持っている、そういう人たちの心に自分の心を重ね合わせるというか、想像するというか、そういうことが私たち大人にとってすごく大事なことだらうと思うんです。

今ここにいらっしゃるロータリーの方々、まさに世の中のリーダーシップをとっていらっしゃる方々ばかりだらうと思います。そういう方々だからこそ、私はちょっと申し上げたい。さまざまな子供たちの中にも、つらい思い、悲しい思いをしている、失敗したらなかなか立ち上がれない人もいます。そういう人たちへの思いに心を重ねていただいて自分だけの尺度ではなくて、想像する力をもってそういう子供たちのことも考えていただけたら、子供たちはどんなに安定して、将来の希望を持てるんじゃないかなという気がすごくします。

●経済という切り口を学校運営に

西山 ありがとうございます。それでは、白井さん、言い残したことがおありになるだらうと思いますので、お願いいたします。

白井 ロータリーのスタンスというか、人づくりの部分は数量化できないのかと思いますが、特にクラブでは、これは神奈川西ロータリークラブから今

回我々が教育方針にかかわるときにご提言いただいているのですが、「いわゆる学級崩壊、青少年の犯罪の主な原因は、学校のあり方や教師の活動よりは、むしろ児童生徒の側、家庭におけるしつけ、今日の日本人の生活文化全般にかかわる問題が大きく、消費型生活パターン、父親不在、少子化、核家族化、不健全な食事、マスコミ、IT化社会、就学前期の保育こそ要因として浮かび上がってきます。いずれも学校と直接結びつくものは少なく、社会全体と深くかかわる問題と言わざるを得ません」ということで、私が作業を始めるときに示唆をいただいたものです。そして、ここには、数量化したデータで言えるのは、平成13年11月に厚生省が発表しているのですが、これは児童虐待の話なんです、経済がよいときには児童虐待の件数も少ないんです。だから、不景気になる、自殺者が3万2,000人になる、当然、大人だけではなくて、子供も悲しい思いをしているということになります。

たまたま平成2年、3年のバブル期には児童虐待の相談件数が1,000件ぐらいあった。平成12年にはこれが18倍の1万8,000件という形で、経済のおかしさからこういう形になるのかなと、この数字を見てびっくりしたところです。

先ほど青木先生から、皆さん方は経済人であるといったお話もありましたが、横浜市に限って言いますと、一般会計というのが1兆3,000億円です。そして、福祉・保健・医療ということで全体の30%、3,900億円ほど使われている。今日の教育、学校関係では1,336億円で市の予算の10%が使われている。横浜の場合はとりわけ市立大学に1,300億円のうち400億円、500億円の税収を投入していて、市民の理解が得られないという形で、いかなものかということで中間答申が出て、違う形にはなるようです。私は教育委員会へ行くようになって、この辺の予算のことはいいとしても、横浜には子供たちが26万3,000人いまして520校ほどありますが、教員が1万5,000人、昔は小使いさん、用務員さんと言っていたのが、今は技術士さんと言っていますが、そういう方とか給食の方などが3,000人いて、1万8,000人いる。単純な計算をしますと、26万3,000人割る1万

8,000人ということで、児童生徒16.6人に1人教職員の方を雇用している。だから、私の切り口で言いたいの、確かに福祉だとか教育だとか、予算投入がされればされるほど市民感情としてはうれしいことは間違いありませんが、反面、経済が活性化しないと不幸な両親や不幸な子供たちを創造していくぞと、そんな切り口があってもいいのかなと思います。特に横浜は、今年新卒の先生方を700人採用したと言っていました。団塊世代の方が定年になるといったことがあるようです。だけど、我々の世代というのは、皆さん50人学級でやってきたと思うんです。それを40人学級にしると。雇用確保ということであれば、先生の数は同じにして、30人学級、20人学級ということになるらうかと思うんです。それはそれでわからんでもないんですが、やはりバランスのいい予算執行をしてもらいたいし、どうしても経済の切り口という部分を学校運営なり教育委員会の中に入れていかないとだめなんじゃないかと思っています。

文部科学省も我々もそういうことで10年研修をやりなさいと言っております。ただ、現実的には受け入れていただける企業が非常に少ない。マル秘資料なんです、ちょっと校長先生に読ませてもらった、ある学校の先生が三菱重工のところへ夏休みに1週間行ってきたんですが、工場に、会議コスト＝5,000円×人数×時間と書いてあった。その先生は体験研修の中で、自分は教員をやってきて、会議にコストがかかるということを生まれて初めて知ったということなんです。これは、ホテルへ行った学校の先生も、「初めて『ありがとうございます』とか、自分は大学を出て教員課程をやって、いつも『先生』と言われてきたけれども、初めて人に頭を下げてみました。とてもいい体験をさせていただきました」という感想文が出ているんです。ぜひ我々ロータリーは、地域社会の中でそういう先生方のクオリティーを高める、そういうところにも目を向けてやっていくべきじゃないか考える次第です。

●詰め込み教育からの脱皮

西山 ありがとうございます。松村さん、PTAとかのかわりをもうちょっと深くお話ししていた



質問をする横浜戸塚ロータリークラブ中村会員

だけですか。お願いします。

松村 ロータリーが今まで青少年のいろいろな問題にかかわってきて、特に継続的にかかわってきている中では、例えばインターアクト、高校生の交換留学、あるいはロータリー財団関係の大学生以上の奨学金制度とか、大体高校生以上の人にはいろいろな育成の取り組みをしてきました。今後は、これももちろん必要だと思いますが、学校の先生もそうですけれども、特に中学生以下の小学生や中学生に対する教育的ないろいろな取り組み、あるいは育成ということが必要です。学校の子供たち全員を対象にするといった一般的な育成というのは、今まではなされていなかったという印象があります。

いずれにしても、日本の将来というのは青少年、子供たちに託されていくわけですから、これからの時代は、例えば飢餓ですとか、いろいろなことにロータリーがいろいろな形で援助していくことも大切だと思いますが、そういう部分ばかりにとらわれてしまうと、気がついてみたら足元で日本の若い子供たちが将来……といったことにならないように、ロータリーの人たちも子供たちの育成ということに関心を持っていただく。個人的にでも結構でしょうし、あるいはクラブとしていろいろな取り組みをされているところもあるようですが、そういうことも継続してやっていただきたいと考えております。

PTAの役員というのは、自分の子供だけのためにやっているのではなくて、学校の子供たち全員が

かわいいからやっているわけです。ただ、その学校だけの限られた社会になってしまいますから、ロータリアンの人たちがいろいろとかかわっていけるところというのは、大所高所から人生のすばらしい経験をお持ちの方がたくさんいらっしゃるはずですよ。今、学校は、国語・算数・理科・社会ということだけではなくて、特に21世紀になってからゆとり教育ということで、逆にそういうのが外されてきていて、公立に限って言えば、小学校あるいは中学校の教科書がどんどん薄くなってきて、基礎的な部分はどんどんカットされているというのが現状です。そのかわりに自ら考え自ら行動を起こすということで、横浜市の場合は総合学習という言い方をしておりますが、自分でまちに調べにいったりとか、あるいはいろいろな人に学校に来てもらっています。私は中区の本牧ですが、本牧の場合は、昔あの辺は全部海で、昭和30年代まで海苔の養殖が盛んだったので、本牧の元漁師さんに昔やっていた海苔のつくり方などの授業をしてもらったり、あるいは一緒に考えてやっていこうということで、今の日本は今までの詰め込み教育から脱皮しようという流れに変わってきています。ですから、そういう意味でロータリアンの技術や経験等いろいろなことが要求されてくる時代になってきているのではないかなと私は思っております。

●関心を持って子供を見ることから

西山 どうもありがとうございました。

私自身も県立高校のPTAの会長を仰せつかったことがあるんです。学校の校長の立場からとPTAの会長の立場からと、両方の経験をさせていただきました。私は常日頃、学校教育とPTA活動とは車の両輪で、片方が強くても曲がってしまうし、片方が弱くても大変困るんですということを言っています。ですから、今、幼稚園でPTAのお母さん方には、「お母さん方が手伝ってくれるから幼稚園があるんだよ。会長さんも頑張ってるね」ということでやっております。先ほどの家庭教育と社会教育を補うようなつもりで、PTA活動を一緒に手を携えてやっております。

今朝もテレビで言っていましたね、広島の間校長先生がなぜ自殺したのか。教育委員会は事前の研修の仕方、それから校長先生をサポートするシステムを考えなければいけない、改善しなければいけないとっておりました。部外者がポンと来て、会社の経営のように改善点を並べてこれを改善しようとしても、先ほど青木先生がちょっと触れていましたが、教育というのはすぐ成果が出るものではない。そうなる強い反発があるということは否めないでしょう。それから、私はこの校長先生の死がよくわかる気がするんです。校長としてこれこれこういうことをしたいなと思っても、先生たちが校長の言うことには反対するという風潮がある。会社の経営だったら、社長の言うことに反対すれば「おまえは首だ」と言える。先生たちは一家言ありますから、「できないよ」と。それから、例えば「夜の7時から地域でこういう会合があるんですが、担当の先生、だれか行っていただけませんか」と言っても、「7時からじゃねえ」と言う。それがネックです。それから、道徳という教科が言われたときに、先生は「おれたちには道徳の免許はないんだ。だから道徳は教えられない」と。こんなことがありますか。これが学校の実情です。

ロータリアンがお手伝いいただけるときもそのようなことを念頭に置きながら、内情をよく把握なさってお手伝いいただきたい。そうすれば地域と学校が一体になって、次世代の21世紀を担う子供が育っていくことは確実です。

青木 先ほど松村さんや白井さんから虐待問題等についてお話がありましたが、今の子供たちには愛が足りないと思うんです。愛情をすごく欲しがっていると思うんです。ですから、家庭だけにその愛を求めていくのではなくて、お父さん、お母さんではなくて地域社会の中で十分にロータリアンの方々がさまざまな子供たちに愛を存分に注いでいただいて、関心を持って子供を見ていただけたらなという思いが大変強くなります。子供たちが一人残らず、生まれてきてよかったと言えるような家庭であって、住んでいてよかったと言えるような地域社会にしなければならぬと思うし、そういう環境を整

えることが私たち大人の役割ということをすごく感じます。

西山 ありがとうございます。

岡田屋モアーズの宣伝ではありませんが、ひところ岡田屋モアーズで、10年ほど前ですか、ハート・トゥ・ハートという言葉を用いて、それを標語のようにして言っていました。私は、今も学生たちに話しています、「子供たちに接するにはハート・トゥ・ハートだよ」と。まさに青木先生の締め言葉がちょうどそこへ来ましたので、うれしいなと思っております。

ここで、もし会場から、ご意見、ご質問があらすればお受けしたいと思っております。

中村 戸塚ロータリークラブの中村と申します。このたびの学校へロータリーがお手伝いをするということは非常に結構なんです、その根本に、まずそれが始まった根拠が何かということなんです。私がちょっと気になるのは、今の教育はだめだ、ともかく間違っているということから出発しているとしたら、私は大変なことだ、恐ろしいことだと思いません。そうではないと思えます。もっと現状を見たい。我々が知らないことがあるんじゃないか。あるいは、本当の教育の現場がどうなっているのか、それを我々ロータリアンとして、あるいは大人として勉強したい。そのために何かできるのではないか。そういう視点から、そういう姿勢から入ってほしいと思えます。

西山 ありがとうございます。実は私が縷々説明したところは、そのように言っても難しいですよということで、ご指摘のとおりで、上手に学校とハーモニーをとって接近してほしいと述べたつもりで……。ちょっと言葉が足りなかったかもしれませんが、どうぞその意をお酌み取りいただいて、ロータリアンが行ったらすぐ手伝えるんだではなくて、手伝うことがあるのかな、どういうところがロータリアンとして入っていけるのかなと、このようにことでその地域、その学校、そういう実情に合わせてお手伝いいただければ大変ありがたいと思っておりますので、よろしくご理解を賜りたいと思えます。

(文責：記録委員会)